

宮崎の「橋の日」活動の歩み

Tsuruha
鶴 羽Hiroshi
浩*

1. 「橋の日」の制定と実行委員会の設立

「橋の日」は、今から32年前、昭和61年8月4日宮崎県北部に位置する延岡市を流れる、五ヶ瀬川水系、大瀬川に架かる旧・安賀多橋（昭和12年架橋・RCアーチ橋）で産声を上げた。

「橋の日」は、郷土のシンボルである河川とそこに架かる橋を通して、ふるさとを愛する心の高揚と河川の浄化を図ろうと、延岡市出身で元・会社員 湯浅利彦氏が昭和60年に提唱した。湯浅氏は子どものころ、延岡市街地を流れる大瀬川を毎日のように泳いだり、魚を獲ったり、またさまざまな橋を望みながら、まるで河童のように川で遊んだりしていた。台風になると豪雨で木橋が流され町が分断されたときの不便さに橋の存在の大きさやありがたさを子供心に思い知らされたという。

湯浅氏は、仕事の関係で住んだ仙台市を流れる広瀬川の美しさに感動し、後にその広瀬川と郷土延岡市を流れる五ヶ瀬川の流域の人たちによる姉妹河川交流を提唱した。これは、私たちの"宝"であるキレイな河川を未来に繋ぐという、一つの河川浄化策でもある。姉妹河川交流活動として、当時旭化成陸上部の宗兄弟によるジョギング教室を仙台市で開催するなど、市民レベルの交流を図った。現在でも延岡市ではサッカーチーム「ベガルタ仙台」のキャンプ地として受け入れるなど市民レベルの交流が活発である。

一方、音楽を通したまちづくりも行った。仙台市出身のシンガーソングライターさとう宗幸氏を招いての「水と緑のまちづくりブリッジコンサート」に合わせて、同コンサートに出演した宮崎出身の音楽家 小坂恭子氏にオリジナルソングを依頼。宮崎県北の高千穂町から延岡市を流れる五ヶ瀬川をテーマにした楽曲「五ヶ瀬の流れに」が完成した。川とともに暮らす人々の思いや未来への祈りが込められたこの歌は、今でも地域の方に歌い継がれている。

以上、さまざまな活動を行いながら、その延長線上に「8月4日（ハシ）・橋の日」が誕生することとなる。

翌61年に湯浅氏参加のもと、全国に先駆け「橋の日」活動が実施された。第1回橋の日まつりでは、「延岡の橋、今昔」写真展、早朝清掃、生花の装飾、郷土芸能保存会による踊り奉納、高欄に風鈴やパラソルを取り付けるなど、橋に感謝するとともに「橋の日」を祝う行事が多彩に行われた。私は、当時勤めていた会社の上司と湯浅氏が知人という縁もあり、スタンプラリー担当として参加した。

翌62年に宮崎市の大淀川に架かる橘橋を会場に、第1回目の宮崎「橋の日」が実施された（写真-1）。当時の横



写真-1 第1回 宮崎「橋の日」行事

山実行委員長によると、「橋の日イベント当日は午前7時30分に市民会館噴水広場に集合し、委員長挨拶、来賓挨拶、ラジオ体操、橘橋・大淀川河川敷清掃、橋・河川学習、橋上より風船を放ち、橋に生け花を掲げるといった行事だった。このイベントに協力いただいた方々は夫婦同伴組、そして地域の多くの子どもたちが参加した。横断幕や看板を取り付けたり、風船に橋を結びつけたりの作業で、汗びっしょり。いま思うと当時の行事を何とかやり遂げたものだ。」と振り返られていた。

1987年8月21日（昭和62年）、当時の松形宮崎県知事を囲む朝食会があり湯浅氏も参加した。その折「橋の日」に関心を示された知事の賛同を得て、「新ひむかづくり運動県民会議」会長 塩見一郎氏を当会の会長に、事務局長の青井正彰氏を副会長に迎えた。また宮崎大学工学部 藤本廣教授に相談役をお願いし、宮崎「橋の日」実行委員会を10名で発足した。その後、延岡市は「橋の日」の発祥の地、宮崎市は「情報発信地」としての役割を担い、活動が続けてきた。

2. 「橋の日」活動のあゆみ

私は、宮崎市への職場の転勤がきっかけで平成2年から事務局としてかかわることになった。

振り返ってみると、最初の10年間は「橋の日」という経験のない活動を手探りの中で推し進めるという基礎づくりの期間だったように思う。全国へこの活動を広げるために委員会にて協議し、まずは、「橋の日」をイメージしたシンボルマークを公募したところ、全国より305点の応募があり（写真-3）、図-1のマークを選定した。

次に「橋の日」テーマソングの制作も行った。作詞は湯浅氏、作曲は斎藤正浩氏。現在この歌は、プロ歌手 大城

* 宮崎「橋の日」実行委員会 事務局長

キーワード：地域づくり、協働、河川愛護、記念日



写真-2 シンボルマーク審査風景



写真-3 河川浄化の願いを込めて、魚の放流



図-1 選定した「橋の日」シンボルマーク

光恵氏によりCD化し、希望者に有償にて配布している。

「橋の日」の歌（川・橋・そして人）

- 1 夏の日差しが まぶしくて キラリキラキラ 光る川
あの川 この川 夢の川 やさしい流れ 美しく
住みよいまちを 育てます
それは あたたかい 母のよう 母のよう
- 2 まちとまちとを 結ぶ橋 人と人との 出会い橋
あの橋 この橋 夢の橋 朝昼夜と たゆまなく
住みよいまちを 育てます
それは たくましい 父のよう 父のよう
- 3 皆でうたおう 晴れ晴れと 空にとどけよ 地の果ても
あの町 この町 夢のまち 希望に満ちた 人々の
ふれあう心 虹の橋
それは 素晴らしい 懸け橋ね 懸け橋ね



写真-4 子どもたちによる「ひょっとこ踊り」



写真-5 「橋の日」座談会風景

平成6年には、念願であった8月4日「橋の日」の認定を日本記念日協会から受け、相当勇気づけられたものである。このころから行政や団体からの物心両面にわたる支援が受けられるようになり、また地元高校からも毎年100名以上の学生の参加をいただくようになった。

実行委員会では、「橋の日」を盛り上げるため、さまざまなイベントを企画した。橋橋周辺の清掃はもとより、橋への感謝を込めた献花、橋のパネル展、稚魚の放流（写真-3）、また歌や踊り（写真-4）など、自らも楽しみながら、橋のお祭りとしてにぎやかに行ってきたが、その一方で、「橋の日」座談会（合計6回、出席者延べ62名）を開催した（写真-5）。各界の方々にご参加いただき、出席者からの橋にまつわる色々な逸話、提案、夢など、心に残るものを数点紹介したい。

（座談会より抜粋）

- ・橋は人々の安らぎの場でもある、四季それぞれに趣を変える橋……朝靄に浮かぶ橋、夕日に映える橋、河川敷に寝ころん

で、夕焼けで向こう側の橋を見るとシルエットがきれいで、世の中の喧噪を離れて一日中でも佇める場でもある。（民謡研究家）

- ・「橋の日」という名前は、文学的にも非常にいいですね。（俳人）
- ・アメリカの金門橋でも橋の上で大イベントを行っている。（米国人大学講師）
- ・橋は人の出会いの場でもある、小説「マディソン郡の橋」は有名なが、橋はロマンチックでおしゃれなところでもある。（設計士）
- ・橋というのは機能とか造形性だけでなく「古里への架け橋」という精神的な意味も大きい、宮崎から他の都市に移って、橋橋を心の古里として便りで表現している児童も居り、情緒教育の中でも大切なことである。（小学校教師）

また情報発信のため、平成8年にホームページを開設し、他県で橋に携わる方々との情報交換も行うことができた。そのほか、活動10周年を記念してイベントを開催し、併せて記念誌も発行した。

3. 地域に根ざした活動を

活動11年目からは、地域に根ざした活動に力点を置いた。「橋の日」の実施会場である橋橋の歴史を調べていくうちに、「初代橋橋」を架けた医師 福島邦成氏の存在を抜きにして地域を語れないことを再認識した。なぜなら福島氏は、橋が宮崎のまちづくりの起点であるとの思いから橋橋を架橋し、宮崎の近代化に貢献した人物である。また、氏の居宅が宮崎市内に現存し、築300年を経た武家屋敷であることも知った。残念なことに、福島邸の保存運動が実を結ばず解体されることになり、お別れイベントを開催した。その折、「福島邦成と橋橋」(写真-6)と題した紙芝居を作成し、現在も宮崎市内で上演会を続けている。



写真-6 紙芝居「福島邦成と橋橋」上演会にて

平成13年には宮崎県内に存在する94橋の石橋をまとめたポスターを制作し、県内の全小中学校・高校に配布したところ、各業界の広報誌にて紹介され、テレビ番組で特集が組まれるなど反響があった。特筆すべきは、このポスターをきっかけに県内で合計389橋の石橋の存在が明らかになったことである。さらに平成15年には、「宮崎の橋101選」ポスター(写真-7)を制作。これは宮崎県民から応募していただいた県内の魅力ある橋、総数303橋の中から101の橋を選定したものである。

このポスターは、県内の高校や大学、関係機関へ



写真-7 「宮崎の橋101選」ポスター

2000枚配布した。このポスター制作を通して、橋梁はすべて先人の努力と知恵、技術のたまものであることを認識し、改めて地域を知り、愛するきっかけとなった。

4. 地域と連携した活動へ

平成18年3月、大淀川に新たに架橋された天満橋の開通イベント(写真-8)への協力を積極的に行った。



写真-8 にぎわった「橋の日」ブース

一方、当会では活動20周年の節目を迎えた。以前からあためていた「橋の日サミットinみやざき2006」を同年8月に開催した。メインイベント「橋の日」パネルトーク(写真-9)では、テーマ「橋から見る地域づくりとロマン」のもと、パネラーとして、ほくりく橋の日実行委員会(国土交通省北陸地方整備局道路部地域道路課長 廣松新氏)、東京橋の日実行委員会(千住文化普及会 櫛原文夫氏)、奈良県十津川役場(OMC十津川太鼓倶楽部 尾中さとみ氏)、鹿児島橋の日推進協議会(川添輝久氏)、(いずれも当時の役職)をお招きし、今後連携して活動することを確認した。同年、湯浅氏が橋梁新聞社より、長年の啓蒙と実践活動が高く評価され「橋梁新聞賞(ブリッジマンオブザイヤー)」を受賞した。



写真-9 橋の日サミットパネルトーク

平成21年に会長が塩見一郎氏から、元宮崎県土木部長 日高孝氏に交代。地域活動グループや行政と連携した活動を活発化させた。

アニメ映画「パッテンライ」の上映会を県内で開催、また道路愛護活動を続ける、道守みやざき会議の皆さんとともに「橋橋フラワーブリッジ」イベント(写真-10)や先



写真-10 橋梁を色とりどりの花で飾った「橋梁フラワーブリッジ」イベント



写真-11 「てげいっちゃんみやざきの橋」ポスター

述した福島邦成邸の移築保存運動にかかわるイベントの協働開催などがある。

そのほかにも、宮崎県との協働による「てげいっちゃん（宮崎弁でとってもいいですよ）みやざきの橋」企画では、宮崎県内に現存する主な「はし遺産」をポスター（写真-11）にして県外にアピールするとともに、県民が「はし遺産」の価値を見つめ直し、地域活性化へ活用するための契機となった。ポスター完成後、掲載された橋や地域の歴史遺産を訪問する活動を以降3年間続けた。

平成23年、活動25周年には、「橋を通じた地域づくりシンポジウム」（写真-12）を開催。シンポジウムのパネラーとして「橋の日」活動を民間で進める、「名橋日本橋保存会」永森昭紀事務局長、行政の立場から福岡市の名島橋で「橋の日」活動を実施している国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所長 山本悟司氏をお迎えしてのシンポジウム、宮崎県内で「橋の日」活動を続ける団体による事例発表を行った（いずれも当時の役職）。

シンポジウムでは、地域づくりには長い時間と多くの人々の思いや熱意を途切れることなく継いでいくことが大

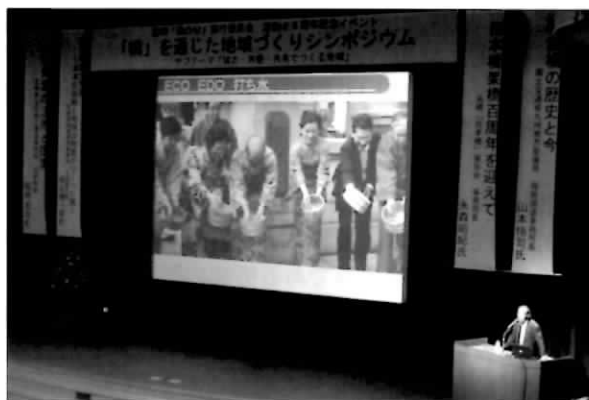


写真-12 さまざまな活動が紹介された「橋を通じた地域づくりシンポジウム」

事であること、子どもたちに記憶を継ぎ、夢を語れる地域づくりには、「橋」は誰にでも理解しやすいテーマであることを改めて感じ、勇気もらった。

橋の歴史を振り返る中で、そこには「人」がいて「夢」があって「技術」がある。人に愛される「橋」をつくりたい、百年も残る橋をつくりたい…。その強い思いを地元で育て、そして生かし続け、継承していこうとする仲間たちがいることを知った。そしてその継承を支えているのは信頼関係であると再認識した。

平成26年には形のない橋への取り組みも行った。これは、防災・減災へのかけ橋のことである。宮崎では南海トラフ地震への備えが喫緊の課題であることから、350年



写真-13 贈呈式

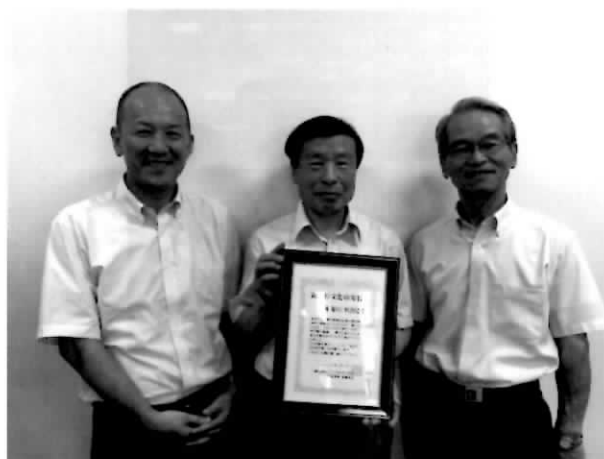


写真-14 写真右より日高前会長、湯浅氏、事務局長

以上前に宮崎を襲った大地震を題材にした紙芝居を宮崎県と協働制作した。この地震は被害の大きかった宮崎市木花の島山地区にあった地域の名前を取って「とんところ地震」と呼ばれている。地元ではこの地震のことを忘れないように50年ごとに記念碑を立て語り継いでおり、現在7本の記念碑が立っている。この災害伝承を物語にして紙芝居にまとめ、県内全小学校へ寄贈（写真-13）した。この紙芝居について、メディアに何度も取り上げられ、当会はさらに県民への認知を高めた。

平成27年は記念すべき年となった。宮崎で生まれ育った「橋の日」運動が、全国47都道府県まで拡大したからである。提唱者である湯浅氏が全国に広げべく広報活動に努め、また委員会として情報発信を続けた結果である。同年、当会は日本記念日協会より「記念日文化功労賞」を受賞（写真-14）した。

5. 活動30周年を迎えて

平成28年、活動30周年を記念して、第2回「橋を通じた地域づくりシンポジウム」を開催。松村 博氏（元大阪建設局）より、テーマ「土木史の視点から見た橋」と題した基調講演。土木技術は、江戸時代以前から民衆の開かれた技術であり、図面が読める土木技術者が土木史的観点から検証すると、これまでの歴史的常識に多くの間違いがあることを指摘。その結果、技術的要因、経済的要因、政治・行政的要因により架橋されていることなどを、歴史的背景をもとに解説いただいた。また、渡辺 浩氏（福岡大学工学部社会デザイン工学科教授）からは、「地域の森林資源を使って架ける私たちの橋」と題して、お話いただいた（写真-15）。



写真-15 会場から多くの共感の声があがった

木材の利活用がCO₂削減にも効果があり、経済循環を生むシステムづくりが必要であること、そして現在、木材の活用はコンクリートとの強度比較でも高く、現代の技術力の向上によりさまざまな利用が可能であること、一方、森林資源を利用して架ける橋は森林の管理につながり、中山間地域での就労の場が増すことにもつながること等を提案いただくなど、スギ生産量日本一である宮崎県の活性化に資する内容であった。

一方、事例紹介では、4団体が登壇。印象的だったのは、平成28年西米良村で第1回「橋の日」を実施した西米良「橋の日」実行委員会代表であり、女性土木技術者でもある中武倫子氏が活動紹介（写真-15）のなかで、「村内の子どもから大人まで総勢111名の参加があったが、これは村



写真-16 河野宮崎県知事との記念撮影

全体の約1割の参加で、青年会も子どもたちも大人も生き生きとして協力して「橋の日」活動を行うこと、これがまさに私が目指してきた笑顔あふれる地域づくりでした」との報告があったことである。

同年、永年続けた道路清掃活動に対して（公財）日本道路協会より、表彰を受けた。そして、本年2月には河野宮崎県知事より、多年にわたる社会貢献活動に対して、「明日のみやぎきづくり表彰」を受けた（写真-16）。そのほか、30年の活動の節目として、ホームページリニューアルを行い、これまで発行した記念誌や広報資料などの情報をアーカイブ化して公開した。

6. 本年、第32回宮崎「橋の日」活動

毎年、「橋の日」活動は4月に開催する「橋の日総会」からスタートする。今年度は、役員改選の年で、9年間会長を務めていただいた日高孝氏に代わり、元宮崎県 県土整備部長 大田原宣治氏、新たに副会長として宮崎大学の森田千尋教授が就任した。

今年の「橋の日」は、晴天に恵まれ総勢150名の参加により、実施した。会場は、宮崎市の中央を流れる大淀川に架かる長さ389メートルの橋橋。川端康成の小説「たまゆら」に登場する宮崎を代表する橋である。

式典は午前9時から。当会会長挨拶の後、戸敷正宮崎市長、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所 神山泰事務所長、宮崎県土木事務所 矢野透所長から来賓祝辞をいただいた。その後、関係者や初代橋橋を架けた福島邦



写真-17 関係者による橋への献花



写真-18 橋みがき風景



写真-19 熱心に聞き入る子どもたち

成のひ孫 福島順一氏などによる献花（写真-17）、参加者全員による記念撮影の後、橋みがき（写真-18）に取りかかった。参加した高校2年生Aさんは欄干を拭きながら、「予想以上に汚れていた。磨いたことで気持ちもすっきりしたと改めて感じた」と話していた。

また、宮崎県鋼橋コンクリート構造物塗装協同組合による橋上の点字ブロック清掃や、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所の協力のもと、橋橋体験見学会＆「道路老朽化対策」パネル展を行った。橋の点検作業（写真-19）に参加した小学生6年生Bさんは「コンクリートをたたくと、悪いところは音が違うとわかった。作業は大変だな」と話していた。

その他の活動として、3つ紹介する。現在、宮崎県内に26ある市町村すべてに「橋の日」推進運動を展開しているが、今年は新たに県北の美郷町が加わり9市町村で「橋の日」活動が実施された。これからも更なる広報活動に取り組みたい。

次に地域のお宝再発見ツアー。今回で7回目となる本ツアーは、11月に鹿児島県内の橋とその他の土木遺産、土木インフラの視察を行うなど、これまで宮崎県内をはじめ、九州管内を訪問した。余談ではあるが、去年は台湾へと足を伸ばした。これはアニメ映画「パッテンライ」上映会を平成23年に開催したことが縁である。この映画は、

日本統治時代の台湾で土木技師として活躍した八田與一氏の業績と台湾地元民の交流を描いた作品。ツアーでは、「烏山頭ダム」などを見学した。3つ目は、年間を通じた紙芝居上演活動。「とんところ地震」と「福島邦成と橋橋」の両作品とも当会のオリジナル紙芝居である。次年度は、この「とんところ地震」を絵本化し、市内の小学校に寄贈する予定である。

7. 未来へ向けて

現在、実行委員会メンバー47名にて活動が続けているが、ここまで来られたのは、地域の団体や企業・行政などの支援機関、そして地域住民の理解と協力のおかげだと深く感謝している。その中でも、宮崎学園高校の生徒たちは25年以上にわたって、この活動に参加していただいている。これらの支援に応えるためにも、更なる「橋の日」活動の充実とともに、県内外へ広げ続けていくことが大切だと考えている。



写真-20 橋橋視橋前にての集合写真

最後に、「橋の日」が記念日になったのだと改めて実感するエピソードがある。それは「橋の日」当日に車を起動すると、カーナビより「今日は8月4日、橋の日です」とのアナウンスが流れてくることである。日本中で、この記念日情報が、カーナビをはじめ、さまざまなメディアにて告知されているのだと思うと、改めて元気と勇気をいただくのである。

地域に住む人が公共の財産である「橋」、そして「川」への関心を寄せ、さまざまな立場で考える記念日になればと考えている。その活動を通してふるさとを愛する心を高め、河川浄化の輪を広げていきたい。その意味からも、「橋の日」を通して地域の魅力を伝え、地域住民との協働によるまちづくりを楽しみながら、「人と人」、「地域と地域」とのつながりを取り戻す「架け橋」となることを願っている。

■お問合わせ

宮崎「橋の日」実行委員会 事務局
〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂2574-6
電話：090-9566-4159 FAX：0985-72-2730
E-mail：hirosongs@dance.ocn.ne.jp
URL：www.hashinohi.jp
「橋の日」で検索してください。